

<実践報告>

## 急性期実習（成人・老年看護学実習Ⅱ）における 学生による授業過程の評価

### Evaluation of Teaching Learning Process by Students in Acute Clinical Nursing Training (Adult/Gerontological Nursing Training II)

富山ひとみ<sup>1</sup>, 千葉のり子<sup>1</sup>, 長澤久美子<sup>1</sup>, 原田千代子<sup>1</sup>, 長谷川秀隆<sup>1</sup>,  
駒井裕子<sup>1</sup>, 原澤純子<sup>1</sup>, 坪井秀介<sup>1</sup>, 森洋子<sup>1</sup>, 鈴野いずみ<sup>1</sup>

Hitomi TOMIYAMA, Noriko CHIBA, Kumiko NAGASAWA, Chiyoko HARADA,  
Hidetaka HASEGAWA, Hiroko KOMAI, Junko HARASAWA, Shusuke TSUBOI,  
Yoko MORI, Izumi SUZUNO

1 常葉大学健康科学部看護学科

Department of Nursing, Faculty of Health Science, Tokoha University

#### 【要 旨】

平成 29 年度急性期実習（成人・老年看護学実習Ⅱ）を履修した学生による授業過程評価のための質問紙調査により、教育の質向上および改善について課題を明らかにすることを目的とした。分析の結果、学生評価が高かった項目は、「学生同士が協力し合うことができた」が最も高く、次いで「臨地実習指導者は学生の質問に分かりやすく答えていた」、「実習担当教員は学生の質問に分かりやすく答えていた」であった。学生評価が低かった項目は、「学内の技術演習の内容は実習を展開するために役立った」、次いで「カンファレンスに積極的に参加できた」、「学内オリエンテーションの内容は実習を円滑に行うために役立った」であった。これらのことから、急性期実習（成人・老年看護学実習Ⅱ）において、学内技術演習、カンファレンスの取り組みについて、より効果的な支援の必要性が明らかになった。

---

Key Words : 学生, 質問紙調査, 急性期実習, 授業過程の評価

#### 1. はじめに

看護基礎教育における臨地実習の目的は、健康問題を持つ人や危機的状況にある人の尊厳や自由・苦痛の意味を考え、看護とは何かを問うプロセスを学び、看護を展開し看護観を形成することである<sup>1)</sup>。看護基礎教育にお

いて各領域の臨地実習は教育の柱ともなる科目であり、学生が看護実践の能力を習得する上で大変重要である。

本学看護学科成人・老年看護学実習では、臨地実習に向けて、学内で事前オリエンテーションを実施し、流動的な看護実践の場においては、臨床指導者と協同し充実した指導が

行えるように取り組んでいる。その評価として、学生の質問紙調査を実施している。4年生前期に履修する成人・老年看護学実習Ⅱは、周手術期・急性状態にある対象とその家族の健康問題を統合的に理解し、看護を展開するうえで必要な知識、技術、態度を修得することが目的である。実習指導における課題を明らかにすることで学生ニーズに応じた効果的な指導を検討することができるかと考える。

今回、平成29年度急性期実習（成人・老年看護学実習Ⅱ）を履修した学生を対象に、教育の質向上および改善について課題を明らかにすることを目的として、質問紙調査結果を分析したので報告する。

## 2. 急性期実習（成人・老年看護学実習Ⅱ）の概要

本学の急性期実習（成人・老年看護学実習Ⅱ）は、4年生前期に配置された4単位180実習で、3単位135時間の急性期病院、1単位45時間のがん専門病院の実習で構成されている。

## 3. 目的

急性期実習（成人・老年看護学実習Ⅱ）履修後の学生による授業過程評価のための質問紙調査により、教育の質向上および改善について課題を明らかにする。

## 4. 方法

### 4.1. 研究対象者の選定

平成29年度急性期実習（成人・老年看護学実習Ⅱ）を履修した本学健康科学部看護学科4年生80名のうち、質問紙調査に同意が得られた学生79名とした。本研究は、急性期病院における急性期実習終了後に調査を行った。

### 4.2. 質問紙の概要

平成29年度急性期実習（成人・老年看護学実習Ⅱ）終了後に無記名の質問紙調査を実施した。質問紙は、舟島ら<sup>2)</sup>の「授業過程評価スケール—看護学実習用—（10下位尺度42項目からなる5段階リカート尺度）」をベースとした先行研究<sup>3)</sup>を参考に、本実習に適した内容として、実習の構成・内容、指導技術、実習環境を問う16項目で構成した。舟島らのスケールは、学生が評価主体となって看護学実習の過程を評価する際に活用できる他者評価尺度であり、教員がこの尺度を用いて教授活動の質を明らかにすることで、次回の看護学実習に向けて教授活動を改善できる<sup>4)</sup>、と報告されている。

質問内容は、「1. 学内オリエンテーションの内容は実習を円滑に行うために役立った」～「16. 記録物・提出物の内容は、適切にまとめることができた」等とし、授業過程で重要なカンファレンス内容については、独自に質問を選択した。「全く当てはまらない」：1点、「あまり当てはまらない」：2点、「当てはまる」：3点、「かなり当てはまる」：4点、「非常に当てはまる」：5点の5段階リカート尺度を用いた。また、自由記載欄を設け、学生が意見を述べやすいように配慮した。得られたデータから全体の傾向について分析した。

### 4.3. データ分析

質問紙のデータは単純集計を実施した。自由記述については、研究者間で記述内容を検討し、1つの意味や内容が含まれるデータとし、同類の意味と捉える内容で分類をした。

## 5. 倫理的配慮

研究参加は自由意思であり、学生の任意によるものであることを伝え、同意しない場合でも不利益を生じることは一切ないこと、成

績には一切関係しないことを書面で示し説明した。また、質問紙調査同意後の撤回やいつでも中止や中断ができることを伝えた。同意書の提出をもって同意したとみなすこと、個人情報・プライバシーの保護について説明した。研究結果の公表について、「常葉大学健康科学部研究報告集」に公表する予定であることを伝えた。なお、研究活動は倫理審査委員会の承認（承認番号：研静17-16）を得て実施した。

## 6. 結果

### 6.1. 研究対象者の概要

平成29年度急性期実習（成人・老年看護学実習Ⅱ）を履修した4年生で、研究協力の同意が得られた79名であった。そのうち有効回答であった75名（94.9%）のデータを分析対象とした。

### 6.2. 質問紙調査について

全体の回答の割合を図1に表した。16項目の中から、「かなり当てはまる」、「非常に当てはまる」と選択した割合は、「1. 学内オリエンテーションの内容は実習を円滑に行うために役立った」：65.3%、「2. 学内での技術演習の内容は実習を展開するために役立った」：45.3%、「3. 実習前・実習中を通して必要な学習課題に取り組むことができた」：76.0%、「4. 今までの学習内容を活用しながら実習を展開できた」：73.4%、「5. 実習の目的・目標をふまえた実習の展開ができた」：74.7%、「6. 受け持ち患者に対し、計画・実施・評価の一連の流れに沿って実習を行うことが出来た」：69.3%、「7. 日々の実習内容を振り返りながら、それを活かして実習を展開できた」：76.0%、「8. 学生同士が協力し合うことができた」：86.7%、「9. 計画した援助を適切に対象者に行うことができた」：68.0%、「10. 必要に応じて実習担

当教員に助言を求めることができた」：80.0%、「11. 必要に応じて臨地実習指導者に助言を求めることができた」：77.3%、「12. 実習担当教員は学生の質問に分かりやすく答えていた」：80.0%、「13. 臨地実習指導者は学生の質問に分かりやすく答えていた」：82.6%、「14. カンファレンスによって実習で実践した内容を振り返ることができた」：77.3%、「15. カンファレンスに積極的に参加できた」：62.7%、「16. 記録物・提出物の内容は、適切にまとめることができた」：73.3%であった。

16項目中「かなり当てはまる」「非常に当てはまる」と学生評価が高かった項目は、「8. 学生同士が協力し合うことができた」で最も高く86.7%であった。学生評価が低かった項目は、「2. 学内での技術演習の内容は実習を展開するために役立った」45.3%であった。

### 6.3. 自由記述について

同一内容（複数回答）を含む39の自由記述を分析した結果、【臨床指導者からの指導について】【教員の指導について】【病棟における実習環境について】【実習上での経験について】【学内日の環境について】の5項目に分類された。

【臨床指導者からの指導について】は、「指導者のわかりやすいアドバイスで考えが広がった」「患者や指導者から多くを学べた」「教員や指導者、様々な人に支えられていた」によって構成され、学生の記述には、それぞれ「実習指導者の違う視点からのアドバイスで看護計画や援助方法などの考え方が広がった。指導者がわかりやすくアドバイスをくれた。」「患者や指導者からの学びが多く、身になった実習だった。」「指導教員や病棟の指導者、スタッフ、様々な職種の方が協力・支援がありやる気が出た。」等が見られた。【教員の指導について】は、「教員の的確な

アドバイスで充実した実習ができた」によって構成され、学生の記述には「先生が的確にいろいろ教えてくれたので充実した実習ができた。」等が見られた。【病棟における実習環境について】は、「実習しやすい環境の調整をしてくれた」「病棟の雰囲気も良かった」によって構成され、学生の記述には、それぞれ「実習指導者にはたくさん声をかけていただき、相談しやすかった。」「病棟の雰囲気もよく実習しやすかった。」等が見られた。【実習上での経験について】は、「種々の学習の場で多くを学べた」によって構成され、学生の記述には、「HCUやオペ室での実習や麻酔の影響や術後の患者の状態を知れたこと、デスカンファレンスの参加等ができ、多くを学ぶことができた。」等が見られた。【学内日の環境について】は、「学内日の教室をもう少し確保して欲しい」によって構成され、学生の記述には「学内日に教室を使える時間が限られているため、教室を思う様に利用できなかった。」等の記述が見られた。

## 7. 考察

### 7.1. 実習環境について

質問紙16項目の内、実習指導者と教員に関する質問紙の結果では、実習指導者や教員に対して「必要に応じて助言を求めることができた」、実習指導者や教員は「学生の質問に分かりやすく答えていた」の質問において、「かなり当てはまる」「非常に当てはまる」と解答した学生は各項目とも70%以上であった。

舟島<sup>5)</sup>は、学生は知識や技術の不足を自覚し、自己の未熟さを他者に知られないよう隠そうとする傾向があるため、「他者に支援を要請しにくく、学習機会を獲得しにくい状況に置かれる」ことがある、と述べている。しかし、学生の学習過程であり、他者からの助言や示唆・支援等の助言があることでより効

果的な学習に結びつくと考える。そのため、学生が未熟な自己を隠すことなく安心して自己表現ができる環境が必要となる。今回の学生の自由記述からは、指導者のわかりやすいアドバイスで考えが広がったことや、実習しやすい環境の調整をしてくれたこと、教員の的確なアドバイスで充実した実習ができた等の内容が見られた。以上より、学生は臨地実習において必要に応じて助言を求め、学生にとって納得できる返答や示唆が得られており、学習しやすい環境が整えられていたと推測できた。これらは、変化の大きい急性期の看護を学ぶ上で、学生の疑問を解決し、実習の学びを深めることにつながったと考える。

また、臨地実習においては、教員と実習指導者がそれぞれの役割を果たすためには、両者が協同して実習指導を行うことが望ましい<sup>6)</sup>。協同の要件について滝島<sup>7)</sup>は、実習指導者と教員の良好な関係性や、実習内容・指導方法の共通理解、実習指導において必要になる情報の共有化、教員・実習指導者それぞれが主にかかわる側面の明確化等、の必要性について報告している。本実習での学生の自由記述にも、病棟の雰囲気が良かったことや、教員や指導者・様々な人に支えられていた等の内容が見られ、実習指導者と教員とが良好な関係性を持ち、情報交換や役割分担等の協同が適切になされていた結果であることが推測できた。

以上より、実習指導者と教員とが情報交換等連携を密にとり良好な関係性を築けることで、学生は緊張が少ない状態でより安心して実習に臨むことができ、学びを深めることができると思う。そのことが学生の学習への動機づけとなり、更なる学習への機会となると思われる。したがって、今後も継続して、臨床指導者と教員との連携を密にしつつ協同し、学習環境を整えていく必要がある。

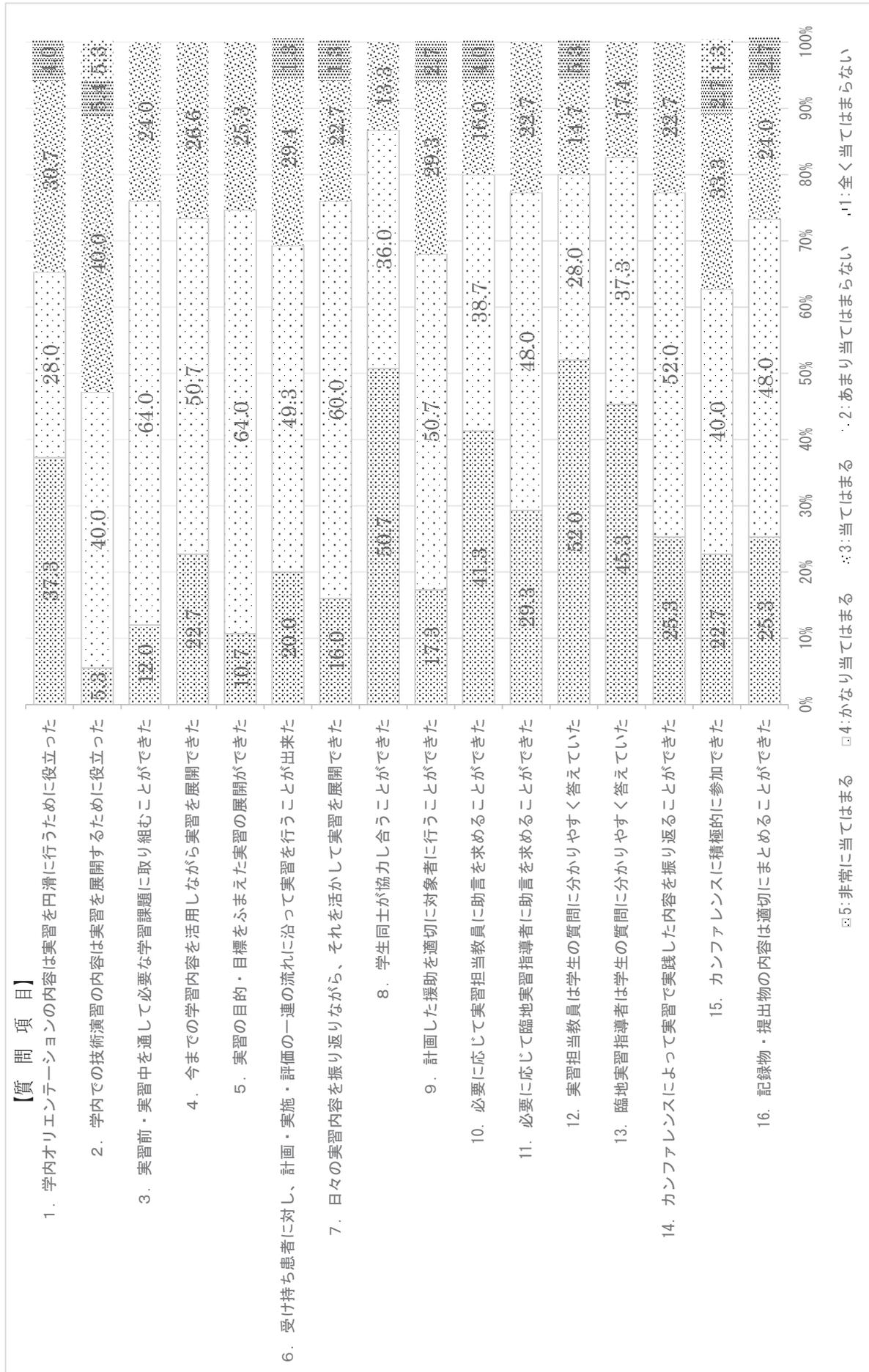


図1：平成29年度 急性期実習（成人・老年看護学実習Ⅱ） 回答の割合

## 7.2. 学生の学修状況

もっとも学生評価が高値であった項目は、「学生同士が協力し合うことができた」で、学生間で実習に対し協力し合えたことがうかがえた。学修状況は、「実習前、実習中を通して必要な学習課題に取り組むことができた」では76.0%、「今までの学習内容を活用しながら実習を展開できた」では73.4%といった学生評価から、既習の学習内容を活かし学生なりに積極的な学習ができたと思われる。「実習の目標をふまえた実習の展開ができた」では74.7%、「受け持ち患者に対し、計画・実施・評価の一連の流れに沿って実習を行うことができた」では69.3%、「日々の実習内容を振り返りながら、それを活かして実習を展開できた」では76.0%を占めた。自由記述からも周手術期・急性状態にある対象の健康問題についての看護計画の立案・評価についての学びややりがいが見られ、学生は達成感をもって学修できたと思われる。先行研究では肯定的な反応を示す学生は50%以上であり、特に学生自身の実習姿勢・態度を問うものとしての事前学習や積極的な参加の項目では70～90%代の結果を示していた<sup>8)</sup>。本学の学生も肯定的な反応を示した学生は70%以上の平均割合を占めた。実習に積極的に参加することや事前学習を学生自身が主体性に実施した結果、実習への達成感があり、実習の評価が高値を示したと考える。先行研究と比較しても同様の結果であった。

## 7.3. 学生評価から課題となること

学生評価が低かった項目は学内での技術演習であった。急性期実習（成人・老年看護学実習Ⅱ）の実習目標には、手術直後や術後経過に応じた看護計画の立案ができること、手術侵襲および合併症について理解したうえで患者の状況に合わせた看護実践が行えることが含まれている。様々な病棟で実習する背景

もあり、実習目標を達成するためには、十分な事前学習による知識と患者の術後経過をふまえて実際の場面を想定した具体的な計画立案といった準備が必要である<sup>9)</sup>。学内演習においては、紙上事例を用いた看護過程の展開と技術演習を実施しているが、実習では学内で学習したことを応用させていく力が求められる。対象論、方法論、目的、理念といった内容を統合していく思考力がより高められるようにする必要がある。教授活動の質を決定づけるには、学習成果と授業過程両側面からの評価が必要である<sup>10)</sup>。学生評価をふまえて、次の授業過程における取り組みの向上をはかり、学習成果が高められるような教員の活動が重要である。

また、受け持ち患者のパターンを予測しながら、回復過程を支援できるよう、個々の学生に対して学習を確認する指導によって学修行動が積極的になるとと思われる。例えば、どのような情報をどのような目的で収集するのか、また、その情報はどのように活用するのかといった学生の学習が促進されるような指導を行うことが重要である。

カンファレンスへの参加については、学生評価が項目中低いことが示されたが、受け持ち患者の経過や疾患が異なることで十分な意見交換となり難いことをふまえた実習担当教員のサポートと学生のグループメンバーの受け持ち患者に対する関心や関わりが積極的になるような支援が必要である。島田は、急性期看護実習に必要と思われる知識に関するカンファレンステーマを実習2～4日目の初期に取り上げ提示することで、実習での学びを統合・発展する一助になる<sup>11)</sup>と述べている。実習における体験を意味づけ知識が深まるような教員のテーマ設定への介入および初期の意識づけは重要であり、学生の状況を見極めながらカンファレンスへの参加が積極的になるような関わりが必要である。効果的なカンファレンスとなるように、教員自らの教育方

法を振り返り指導していきたいと考える。

#### 7. 4. 研究の限界と今後の課題

研究の限界として、今年度のみ質問紙調査の分析であったため、昨年度の学生との学生評価の比較ができないことである。実習内容の理解や指導方法の評価には継続した調査による比較が必要と考える。次年度も実習後調査を継続し、より充実した実習に生かすための課題を明らかにする必要がある。

#### 8. 結論

急性期実習（成人・老年看護学実習Ⅱ）を履修した4年次の学生に急性期実習における学生主体による授業過程評価の質問紙調査をしたことで、下記のこと明らかにになった。

- 1) 実習指導者と教員とが連携をとり協同できたことで、学生は緊張が少ない状態で安心して実習に臨むことができた。
- 2) 周手術期・急性状態にある対象とその家族の健康問題についての看護計画の立案・評価について、学生から肯定的評価が得られた。
- 3) 学内演習では学修したことを応用する力の育成やカンファレンスでの学びの共有に向けての支援の必要性が明らかになった。

#### 謝辞

本研究の実施にあたり、質問紙調査にご協力いただいた看護学生の皆様、また論文作成にあたり、ご指導いただいた常葉大学健康科学部看護学科の諸先生方に深謝いたします。

#### 引用文献

- 1) 文部科学省：大学における看護実践能力の育成の充実に向けてのホームページ，  
[http://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chousa/koutou/018/gaiyou/020401.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/koutou/018/gaiyou/020401.htm)，2002年3月

26日，アクセス2017年8月21日

- 2) 舟島なをみ監修：看護学教育における授業展開 質の高い講義・演習・実習の実現に向けて，216～218，医学書院，2013
- 3) 上武大学 平成20年度看護学部実習アンケートの分析結果，  
<http://www.jobu.ac.jp/pdf/jerc/file6.pdf#search>，  
アクセス2017年8月21日
- 4) 舟島なをみ，前掲書2)，：217
- 5) 舟島なをみ，前掲書2)，：178～179
- 6) 厚生労働省：看護教育の内容と方法に関する検討会報告書，9，2011.2
- 7) 滝島紀子：臨地実習指導における実習指導者と教員の協働のための要件。実習指導者の教員に対する要望。川崎市立看護短期大学紀要17(1)，29～35，2012
- 8) 上武大学，前掲書3)，：アクセス2017年8月21日
- 9) 長田艶子：周手術期看護学実習におけるシャドーイングの必要性。奈良県立医科大学医学部看護学科紀要，8，52～56，2012
- 10) 杉森みどり：看護教育学第3版，医学書院，284，2000
- 11) 島田美鈴：成人急性期看護実習におけるカンファレンステーマ提示の有無による学びの検討，17，97～105，2007

